

生死
轉
玉
教
神

七

13
984
7



遠門
號 984



人言葉花中卷

第七回

実相真如の秋の月

愚痴の暗を暎す語

江戸 東里山人著

煩悩の淵
雲を拂ひ
是生滅法の
大海を渡る
八相
偏



佛の預力あるものあらんへ百筆の荒宿て
 了こと一見ひとみ浮うき妻つまの蝶と蝶の着あはせどありけるるはるはる世
 法跡ほつし八十七年やないちぜん以前むかし武蔵國むさしのくに宮戸川みやとががの旧舎きゆうやを捨
 て出家あつちけ遁世とんせいの意いとあり相次あひつぎ鶴が岡つるがおかの神前しんぜんと通
 病やまとて妻つまふ測とさあるるのをゆめ是夜こゝろ旅あそび日記あきの始はじめ
あそびあゆめとして移うつれより西國さいこくに巡拜めぐりまいの志願こころざしふ記し及および名な
 智山ちさんより濃列谷のうりやく沼ぬままでまぎとく土ヶ國どがくにその足
のり法ほつ二百四十七里にひやくしちり余あまの行程こうりやうをゆく又また後父ちち叔東ちゆうの

扎ざ所じよを経巡けいじゆんりいも遠とほせき陸りくろ矢やの外のちがが濱はま
 ある吟よぶ子こも音ねあかづ
のきの目めまでもさか深ふかきこころもき天あま揚あやをう伏ふせ給たま
のき軒のき廻まわる宿しゆくる妻つまのほつさもと本もと陰かげふ跡あと跡あとあるの
 案あんとい月つきあそあそびるるるるの病やまふ山やま踏ふみ蹴うてなるも
 あり挿さ入いぬるありありあり愛あい食を程ほど眠ね大おほけ夏なつの日ひ入い
 したまひを分わけ佐たすけするの延のちふ命いのちめをぬ敷せ
 責せ任いにしの時ときありゆるるあり宿しゆくりてし知るしる秋あきの夕ゆふ暮くれる

海に場ふ糸を鳴く入相の鐘を響きしは深
 立立への胡且開の戸の開を待てく曉きの影成
 恨む所る人佛お伴りてく鬼と連立るあど日
 毎小換る縁の光第一樹の蔭の命若く定難
 一河の流るの巻別離幼氣生逢ひの六尺輪
 回押りてまじりてまじりて結搦血のくまの色のさか
 憂るものまじりてまじりて馬小伊勢國雲津の
 宿より伊賀強く怒るるを妻小舟載といふ子

てふ小三流うと心持あり馬小舟の杜と名付
 松山ありまじりてと松坂の宿ありてた夜
 も二里宛の海ありまじりて世法除く見替るる
 ありとて二流は國の霊仏霊場名而旧縁を辨
 鏡とて尚布の滝を二見せむやトは舟載へ
 ささきまじりてあふ舟山の林葉小舟系双ひあ
 寺あり恒持の傍もあはれとてく舟小津の八
 重葺く庭小解舟のるあを乱し軒端あり

お願ねがひましくきくき勞ろうふぶ勤ごんの香かをま焚き魚い鳧づもうせせふ
破やられくく月げつ常じょう候こうのた火かをた挑てうぐうとすすがふ
おまままのは靈れい場じやうをえんんがく備びある在處じゆ
いいくくのち中ちゆうにあらる事ことねんふふとしればまま是こゝまでいはしめ
の所僧そう衆しゆう人にんともあらくまあらう候ゆゆいいままよよ一い切き
いいひひててははままふふ入いらるとしればのお世せ期きにまあらてはり
ああららぬぬがらずず解あらるののももゆゆふふ思しららるらららああららぬ
悔くむむををううみみくく今いまもも也や後ご持ぢのの法はう法ぽうのの結むすままがら

定さだめてて妖まじ怪けあるんどどあるあややトト人ひと怖おそむむををああららぬ
後のち同どう寺じとと境かう内ないののままトト摘とつつつととののやや捨する
老らうののあありりトト信しんりりななれればば後ご世せ法ぽう障じやうのの眉まゆをを頻ひん辱じやくり
後のちののささららぬぬ悔あやししくくととのの今いま月げつ一い切き我われはは此こゝにに在ある
貸かすすのの事こととといいふふああららぬぬ是こゝををかかののでで悞あやれれるる事ことななららぬ
おお願ねがひましくきくき勞ろうふぶ勤ごんのの香かをを焚き魚い鳧づももううせせふ
ああれればば平ひらふふ由ゆ無む用ようとといいふふららるるかからら後ご世せののああららぬぬ事ことななららぬ
此こゝのの勤ごんににああららぬぬ事ことななららぬぬ況いはししめめららるる惜あやししむむ身み命いのちをを

求名利と悦もう捨ん命の何惜うらず只ま
 あん法燈を挑し死のそ程くはひくもる目下
 第四の世にびたれが供の法方ありくふ飯初小足
 ともえまの世に世の風評ふありめらんるこそ法障の
 なれふ空くられと油燈の抹香あんと布施ふ
 て尚ありはまの世の中へ釋尊の法障のありめ
 ありと嘯と折知を信ふくくもる影て着世法障の布
 施の物推くくはれ小積くる世障を所代を

掃の陰く看經なりくふ時移目げ夜の四文
 小向くくく煩悩の身まきびくをれぬま如の
 月の影観念の嵐あぐずりめとんも流流るあり
 うら庫裏の方より蒼く光る火の塊あり
 浮破離と飛来くく本堂の内へ入ると等如の如く
 細くあり宙宇を静ふ初うと世の目下又下瀬の
 玉と如く飛巡り星の影を列かごとくあるまを
 世に散りて幾光よあり碎星のぶくふあり散て

消^{きへ}失^せつゝり^{ちせり}髪^{かみ}世^よの^{おどろ}驚^{おどろ}く^{けし}髪^{かみ}色^{いろ}め^めあ^あく^くま^ま世^よあ^あん
 梳^く櫛^しの^の作^し櫛^しお^お髻^{もと}ひ^ひほ^ほと^と梳^く經^{けい}お^お尚^{なほ}ら^らを^を梳^くと
 弄^{あそ}ら^らふ^ふ又^{また}庫^{くら}裏^らの^の方^{かた}より^{より}靜^{しず}く^くと^と歩^あま^まる^る
 者^{もの}あ^あり^りそ^のの^の形^{かたち}容^{よう}紡^{ほう}織^しと^と色^{いろ}色^{いろ}拵^ぎ拵^ぎする^{する}婦^{むすめ}人^{ひと}
 の^の姿^{すがた}整^{ととの}あ^あら^らく^く肩^{かた}お^おろ^ろう^う腰^{こし}より^{より}下^{した}へ^へ血^ちお^お流^{なが}る^るが
 懷^{こころ}中^{ちゆう}お^お赤^{あか}き^き子^こを^を抱^{いだ}き^きて^て髪^{かみ}世^よが^がお^おお^お跪^{ひざま}き^きま^まと
 淡^{たん}く^くと^と泣^ない^いお^お世^よの^の容^{よう}貌^{ぼう}を^をほ^ほく^くべ^べと
 足^{あし}と^と併^あり^り居^ゐる^る婦^{むすめ}人^{ひと}の^の死^しを^を産^うま^ま女^{むすめ}と^とま^まの^の口^{くち}に^にま^ます^すと

迷^{まよ}ひ^ひお^おろ^ろヤ^ヤト^ト香^か火^か捨^{すて}の^の囊^{ふくろ}護^ごの^の帯^{おび}の^の口^{くち}向^{むか}あ^あ
 仏^{ぶつ}足^{あし}を^をひ^ひま^まト^トあ^あり^りか^かれ^れが^が産^うま^ま女^{むすめ}の^の細^{こま}き^き音^ねが^があ^あげ
 ア^アら^ら嬉^{うれ}しく^くも^も今^{いま}宵^よお^おお^お迷^{まよ}ひ^ひの^の一^{いっ}念^{ねん}の^の時^{とき}なる
 時^{とき}も^もさ^さら^らぬ^ぬと^と完^{かん}お^おあ^あら^らく^く泣^ない^い汗^{あせ}神^{かみ}意^いお
 お^お出^いで^で吾^{われ}儼^{げん}る^るの^の雲^{うみ}津^つの^の所^{ところ}の^の老^{らう}あ^あるか^かま^まト^トハ
 故^ゆあ^あつ^つと^と友^{とも}九^く希^き梳^くの^の形^{かたち}お^おろ^ろう^う細^{こま}き^き産^うま^まの^の所^{ところ}か
 ト^トあ^あら^らは^はな^なる^る山^{やま}を^をあ^あら^らく^くい^いら^らう^うと^との^の懐^{なごみ}を^をお^おぼ^ぼろ^ろう^うて^て妊^み娘^{むすめ}の^の
 胎^{たい}月^{げつ}も^も待^{まち}ま^まず^ず産^うま^まの^の身^み付^{つけ}ら^らる^るが^が種^{くさね}く^くの^の苦^く

勞力くらうりくも弱よわりて力ちからの乏つききも
いはれりしごともの魂魄こんぱくは土とちにまらうとく安やすくうま度たぎで
と運くぶまさうと凝こり塊くまり一い念ねん力りき吾わ子のこ弱くらみ通つうじ
てや恙つがあくたまりししで親子おやこ二人ふたりとぬれとも夜よ鶴たづ
母ははに人ひとの教おしえ入いりて口くち惜ひみままのまひ迷まよふて産うむ女め
トあり修しゆ羅らの苦く患んハ夫むをあがらありせりては子この
身みのくをあらびむさ人ひとやあんと街まち小こ伝でん後ご終しゆう
行ゆ遭あへも邂逅こっかいハありても吾わ儂らうが安やす小こ怖おそま

近あ趨きり去さるるさらふはるるののまん力りき後ごのあくしん力りき
のく入いりてまんとはたははちららふまんをいちちんくして
はらうのをいちとんとすればゆめのせぐとはまん其ましみ弱じやくるん
周しゆ樟じやうみぎままのひ世せ傳でんまま幾いく人にんのち小こ教おしをまたうぶ
アラウウ情じやうららやあららふも似にさらるる行ゆゆと津つ猿ゑんくくも又
あらうくて今今いまのあひあるるのあひあるる月づき日ひをあらうくれば要途たう
のたのた端たんもあく修羅らのしんをあらうのしんあく歩ふ歩ふ



言
中

七

道も死の山臥バトあらざるの氷う白むく
 却つて知の怪火の中吾子のほほほほとてゆく
 るのうと押のハ欄こは惜き今を日作のけ子の
 命助けとくさる人へあれつと涙お唾びとておこ
 ころふ又法師のまふ来ころあをてんて今を日
 あれつとよるこびが又一言早變又あきつる
 めやおんとさだお怪き火の塊ゆふをこく
 為難きあらぬ法師のふ中達れころきゆを

ト嬉々も又あつ難く徳のままで連れま
 地獄の責もあるく小吾子の為あら獻さるふ
 のうち成ふ後との押のいあひてけ子の命お助け
 まされりされしト法衣の袖ふやう掛り泣候
 あぞそ及世のけ始申候を夢のく怪熱傷あ
 山の中海の辺りあも地獄あつと俱舎論お説
 たりも実ふ理ありあつるを今階おこりせり成
 あるのふは度あありト馬管意悪を北強

渠がゆきまのどくく彼赤子を拍きあいらあめて
 まはくきんとらあふさ度女ハ又うしつて涙ハ伏紙
 馬場まのせしれハ吾儂が見ある者京押の
 小結小あつと年次子あれは安斎のまな子
 我ふらまよト妻あある財ふ約妻あせーがその樂
 しくも執とあり吾死したるをゆめありも親きうあ
 しくもいふはあれす傷る愁ハの中あれば何年
 吾儂が度女とありて安斎をせーるのよー我

昔あひけ子を見のこ坪まで送つて申さく
 さらば浮世あれまゝあはしトあてま世しこれハ親
 妻きくのあつそ見ある者の名ハ何ニとらあせがしと
 尋ねるふ妻女ハみやま押あはる糸まあまあて
 稲穂を判まトウ者ありはふその赤子があふ羅
 しくも長ハ見のこ方よりくまーああくえぞえもあれが
 何ニ親ふづもあらト夜悲情ふ吉くれがま世
 悲みあつるこハ子細もあるまじふ候あがらも

城立出れば所の山ありて人々法陣のまのくちや
きのかよ
 ざやと持の在るあれををん重けふ門前まで
あつ
 たりは陣をるんと供の舞りあて夜を明しあひ
はひ
 なるうこは法陣の元人ふあまうるは何玉の聖人
あま
 あり上人智徳あてはるるせりあざやト地不跪踏
あま
 我按纏を摩りて忍れられば愛世の人あはしく
あま
 人々安堵のきりては寺の妖怪の度女ト
あま
 りのけり子を人ふはるる一念あり其世夜持の
あま

